

存在感の有無

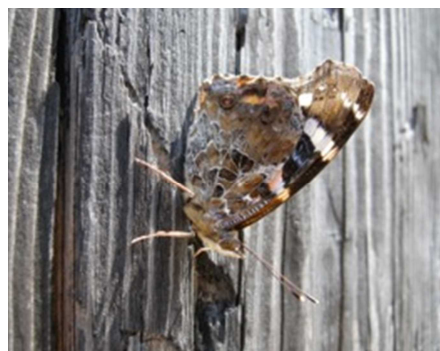
1. テングチョウ

地味な色合いに見えるチョウですが、遊歩道では目立つ存在です。日当たりの良い場所での日光浴が好きなので、人と出会ってしまいます。しかし、私たちはテングチョウが飛び立つまでほとんど気づきません。なぜなら翅の裏は落ち葉の模様で、土の上や落ち葉の上に止まると姿が消えてしまうからです。表側も茶褐色の中に大きなオレンジ色の斑が入っていますが、これも背景に化けてしまいます。翅を畳んで止まっても、広げて日光浴をしても、保護色になっているのです。

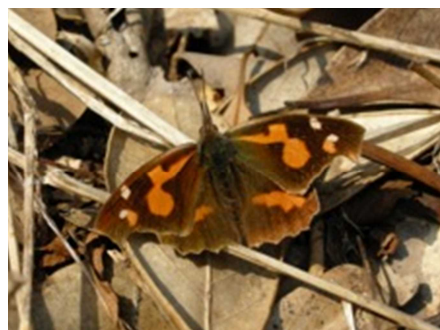
名前は頭に鼻のように見える突起「下唇髭(かしんびん)」があることに由来します。ゆっくり近づいて確認してください。

成虫で越冬しますから、2～3月でも暖かい日には日光浴に出てきます。4月になると繁殖のためナワバリを持ちます。他の個体が近くに来ると追いかけますが、また元の場所に帰ってきます。

まもなくエノキの葉への産卵が始まります。「科」は違いますが、モンシロチョウの青虫によく似た幼虫が柔らかい葉を食べて成長し、夏までには成虫となって現れます。暑い夏は「夏眠」と称して休眠し、活動しません。秋にまた現れ、続いて「冬眠」に入ります。成虫が1年近く生きる、長生きのチョウです。



落ち葉模様のテングチョウ



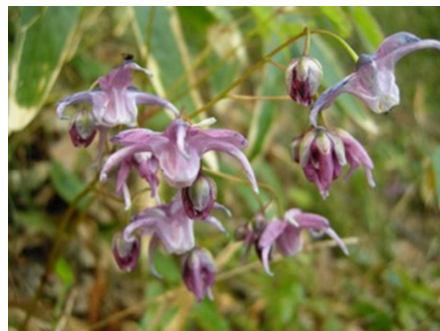
日光浴をするテングチョウ

2. トキワイカリソウ

この時期、打吹山で急に目立つのがトキワイカリソウの花です。昨年出た葉が雪に押さえられ、折れたり汚れてしまっていますが、多年生の地下茎から花茎を伸ばしてきます。途中で葉が一枚つき、葉柄(ようへい)が3分枝した先にまた3枚の小葉が付くため、9枚の葉があるように見えます。

伸び始めの葉は蕾(つぼみ)のようにかたまって上を向き、房状の花蕾は下を向いて伸びてくる姿に勢いがあります。生薬として扱われるのもうなずけます。葉の展開と開花はほぼ同時で、赤紫～桃色の花と、紫外線を防ぐための赤みを帯びた新葉がきれいです。花弁が12枚あるように見えますが、外側の大小8枚は萼(がく)で、中心の4枚が花弁です。花弁の端は蜜を貯める距(きょ)という袋状の構造になっていて、この距の形が船のイカリを想像させています。昆虫は蜜欲しさに距に頭を突っ込み、花粉を運ばされることになるのです。

林内の下草として多雪地帯に分布する植物で、日本海側に生育しています。太平洋側にあるイカリソウは、冬季落葉してしまいます。雪解けの後の林床を彩る春の植物です。打吹山には赤花がほとんどですが、北陸から北は白花で、カタクリの赤紫色に負けて人気がないそうです。



トキワイカリソウの花